
ナットクラッカー

将

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナットクラッカー

【Zコード】

N7969E

【作者名】

将

【あらすじ】

中谷は、彼女から別れを告げられ、一時間前のことを思い返す。

高田は、友との約束を果たすため、友達と遊園地へ遊びに行く。明村は、ホットココアを飲みながら親の帰りを待つていると、カップルのケンかを目撃する。そして、それぞれが大きな事件に巻き込まれていく。

Opening

カツプルたちは、遊園地で遊び、ある事件に巻き込まれていく。
殺人犯は、子供を誘拐し遊園地に行く。
刑事は、殺人犯を追つて、遊園地にたどり着く。

中谷
ナカタニ

「別れよっか。あたし達『恋人たちが愛を深め合つ』日に、別れを告げられるとは思つてもいなかつた。

まず、思ったことは、この『いろ話題の『男度』を計測しているんじやないかといふことだつた。そういうことだと、今までのことも、全てつながる。

「何で？ 確かにケンカは多かつたかもしけないけど、まだ、俺らやつてけるつて！」と、言えども、そうよね。と、返してくれると信じていたが、「そういうことは、一回、けりをつけねばわかるし……」とあつさり返されてしまった。

遊園地に入ったときからそんな感じだつたのか、一時間前のことを見い返す。

灰色の空があり、遊園地日和ではないな、と改めて思う。入场券を買つために、並んでいるけれども、やはり退屈だ。

「クリスマスだから、やっぱり、混んでるね」風香^{フウカ}は、少しむすつとした声を出す。

「もう少し早く来るべきだつたね」

気づけば、次の番が俺らだつた。受付から、次の方どうぞ、と声が聞こえる。

「大人一枚で」と言い、一人分のお金を出す。すると、「あたしも出す」と、風香は言い、財布から一人分のお金を出し、俺に渡す。「いや、いいつて」お金を風香に返す。こういふのは、男が払わなければいけないといふ、『定義』が俺にはあつた。

「もらつて。いいから」だが、彼女は強引に渡していく。それを見ていた受付の人は、「あの、次のお客様がお待ちになつております

すので……』と遠慮がちに言つ。

『すいません』と俺らは謝つて、その場を立ち去る。

園内はクリスマスということもあって、客の大半がカップルや家族連れで占めている。目の前には、この遊園地のシンボルともなっている、天使のような大きい人形がそびえたつていて、家族連れや、カップルが人形の前で写真を撮つていて、

「お腹空かない？」風香は、俺の顔を覗き込んでくる。クリツとした目が、大きくなる。

「少し減ってきたね。そういうえば」と言い時計を見る。十一時三十分だ。これだけ、人が混み合つていれば、十一時頃には長蛇の列に並ばなければならぬ。俺らは、『並ぶ』と言つことにはめっぽう苦手なので、風香の手を握り、「じゃ、買いに行こつか」と言つて、走り出す。

いきなり、肩をつかまれる。後ろを振り返ると、サングラスをかけた、柄の悪い男がいた。黒いロングコートを着ていて、こんな『やくざ』みたいな人が何のようなんだろうか。

「てめえ、当たつたんだけど」親指で後ろの方を刺している。肩に当たつたみたいだ。

「あ、すいませんでした」といいお辞儀をする。また逃げてしまつた、と後悔する。俺は、ピンチが訪れるときの傾向がある。

『何言つてんのよ。私、肩になんかぶつかつてないわよ。それに、誰ともぶつかつてないし』ぶすつとして声で言つ。男が舌打ちをする。

『しりばっくれてんじやねえよ。どうにうことだよ。それ』『やくざ』の舌打ちは、動揺を紛らわすためにも見えた。「おい。ぶつかつてるの、見たよな？」『やくざ』は、後ろに喋りかけている。何を一人でやつてているのか、と思つと後ろから人が出てきた。女だ。背は俺よりも低くて、ちょうど風香くらいだ。ロングヘアで、目

がパツチリとしている。赤色のロングスカートがよく似合っている。『綺麗』というよりは、『可愛い』の部類に入る。彼女だろうかと思つたがそれにしては歳が離れすぎている。兄弟にしては、不釣合いだ。

「よ、よくわかりません……」彼女は、泣きながら小さい声でそう言った。

すいませんでした、と言い、風香を無理やり連れて走り出す。「なんでよ、あっちが嘘ついてるのに」と、風香の不平不満が聞こえる。

一つ、気づいたことがあった。なんで、彼女は泣いていたんだ？

高田タカダ

「じゃあな」頭の中で、紅羽の声が聞こえた。はっとして、後ろを振り向く。でも、そこに紅羽はいなかつた。そのかわり、チケット売り場の女性と、一組のカツプルがもめているのが目に入る。お金をどちらが払うかでもめているようだった。心底、くだらない、と思う。ふと、三ヶ月前の事故が断片的に脳裏に浮かぶ。

住宅街の中を、俺ら三人は、喋りながら歩いている。そのとき、映像がカラーだったものが、白黒に変わる。そして、ビデオで見ていた映像を、スロー再生にしたかのように、映像が遅くなる。紅羽が、トラックが来ているのを見つける。目の前は、工事中で逃げられない。でも、逃げなきや、当たる……。

「早く行くよ！」前田マエダの声で、現実に引き戻される。彼女は微笑みながら、こっちに手招きをしていた。セミロングの髪が、風になびいている。

ああ、と言い、チケットを改札機に通す。ウイーンと、独特の機械音が鳴り、チケットが向こう側へ出る。

チケットを受け取り、園内へ入る。園内には、多くの人が入つて

いた。『クリスマス』だからだろう。まあ、俺らも混んでいり」と承知できているからな、と思う。

園内には、クリスマス用に装飾された大きい天使と城があつた。天使の目の前では、記念写真を撮る人が多くて、先に進みたい俺らにとつてはすごく迷惑だった。

しばらく歩いていると、いきなり前が止まつた。おい、あれ見ろよ、と國分^{コクブン}の声が聞こえる。天使の像の近くを指差している。

「ほら、黒いコートを着ている男のところだよ。なんかもめてんじやん」

「ホントだな。こんな日にもめでてるんだなんて、なにやつてるんだろう」と俺が言つ。よく見ると、さつき、俺らの後ろに並んでいたカップルが、黒いコートの男ともめでていた。後ろに誰かいるみたいだが、よく見えない。

「そんなことより、早く行こうぜ」齊京^{サイキョウ}は、俺と國分の手をとり前へ行く。女子軍団^{ジヨウモン}が前にいるのがわかる。不機嫌なのが、ここからでもわかつた。

振り返つて、さつきの場所へと目を戻すと、あのカップル達はいなかつた。

遅い！ と前田の声が聞こえる。「あの雰囲気^{ムカシキ}じゃ、ポップコーンぐら^ハいはお^ハらわれるだろ^ううな」と言つて^いいる國分の声が聞こえる。元はといえば、お前のせいじゃないか。

「俺、めちゃくちゃ腹減ったんだけど。なんか食おうぜ？」

「一人でポップコーンでも買つてこ^ハよ。観覧車のチケット売り場にいるからさ」待つててやるから、と齊京が言つ。

「そんな冷たいこと言つなよ

「だつて、ホントの事だぜ。ここにいる五人全員が思つてるね。きっと」『きっと』じゃなくて『絶対』だ、と言つ^ハそつになる。

「じゃあさ、チケット売り場に並んでいと^ハき買つてくるよ。それでいいだろ？」

「まあ、並んでいるときなりーいだろ」

「マジで？ そうなつたら、『急がば進め』じゃないか。早く行こ
うぜー」それを、言ひなら『急がば回れ』じゃないか、と新規はつ
ぶやくのが聞こえる。

でも、意味が違うんじゃないか、と思ひが声には出さないでおぐ。
みんなが、一斉に走り出す。

明村アケムラ

遅い。とにかく遅すぎる。ジエットコースターに行つてから、何
分経つてんだ。

僕は、そんなことを考えていた。ホットココアを飲む。

「冷たいつ！」あまりのココアの冷たさに、大声を出してしまつ。
そのせいで、周りのカップルから変な目で見られてしまつ。

「こんなのは、ホットココアじゃなくて、アイスココアじゃないか！
……怒る気にもなれず、携帯を開く。親からのメールは一切届いて
いない。五杯目のココアを飲むために、カウンターまで行く。

田の前のテレビを見ると、『男度をチェック！』と太い題字で書
かれた映像が出ている。なんなんだよ、男度つて、と思う。

「いらっしゃいませ」無愛想なウエイターが、低い声で言った。

「あの、おわり」と言ごとカップを前に出す。

そして、にらみつけるようにこちらを見て、「かしこまりました」と
低い声で言った。

『失礼を承知で聞きますが、元ヤンキーじゃないんですか？』と口
から出そうになる。エプロンが全く似合っていない。

ココアの入ったカップを受け取る。「ありがとうございました」と
気持ち悪いぐらいの満面の笑みでいう。

自分の座っていた席へ、戻つていぐ。

「ココアを飲んでから、十分くらい経つたときだつた。隣のテーブル席から、男の怒鳴り声が聞こえたのだ。

「ふざけんなよ？ お前、別れようつてじりじりだよ…」男の大声で、周囲が凍りつく。

「だつて、ニュースで……」

「つるせえ！ それとこれとは、関係ねえよ…」女の声をさえぎつて、男が言つ。男が強く机をたたき、喫茶店に音が響きわたる。

「てめえ、誰に逆らつてるかわかつてんのか？」

「わ、わかつてるけど……」その時だつた。女と僕の目があつてしまつた。反射的に、そらしてしまつた。何をやつてるんだ、僕は、と自分を叱るが、あの男への対抗心は一向に生まれなかつた。

「次、逆らつたらどうなるかわかつてるよな？」男は、不敵な笑みを浮かべる。明らかに、自分のほうが優位に立つている者の、笑顔だつた。女は、うん、と弱々しい声で答えた。

「行くぞ。また後で、この話はする」周りの田線に気がついたのか、小さい声で言つた。

男は、女を引つ張つて出口へと歩いていく。

また、田があつ。涙をためた、彼女の目が僕に、助けを求めている。

昔のことをふと思いつ出す。^{ハコキ}深雪の顔が次々と頭に浮かんでくる。

もう、昔の自分には、なりたくない。今、助けなきや、誰が助けられるんだ。自分の声が、胸に響く。

衝動的に立ち上がる。黒いコートを着ている男のもとへと走つていいく。

「ちょっと、待つてください」肩をつかんで、乱暴にこすりあと引き寄せる。

「なんだよ、お前」男は、サングラスをはずし、鋭い目でこすりあと引かんでくる。

「一、ココアをこぼされたんですよ。僕のコートにびしりしてくれ

るんですか！」とわざと大声で言ひ。

「しらねえよ。んなこと。あのな、お前みたいなガキとは違つて、忙しいの。」
「ははは」

「別れようとしている彼女を説得するためですか？」男の顔が、少し青ざめる。「うつせえ！　お前何者だよ！」胸ぐらをつかまれる。どうしよう、あとには、もう戻れない。

心の中の自分が、言つてくる。知るかよ。深雪のよつなことにはしたくない。

「あなたの彼女の、兄です」何だよ、その嘘は。自分でも驚いてしまった。なんといつ、低レベルな嘘なんだろう。

「そりなんかい。いいお兄ちゃんなんだなあ。だが、今は俺のもんなんだよ」

男は、不気味に笑い、彼女の手を無理やり引っ張り、走り去る。

「運命には逆らえない」そんな言葉が、頭の中で響く。

中谷

「ニュースです。昨日、月夜市^{ツキヤシ}で起きた殺人事件の有力な情報が、入つてきました。犯人の名前は、香田^{コウダ}実^{ミハル}。性別は男。黒いコートを着ていて、身長は約180cm。サングラスをかけています。あと、犯人は拳銃を持つているとの情報です」

遊園地内の喫茶店で、俺らは注文の順番を待っていた。俺らのような、注文を待っている人たちのために作られたのか、目の前にはテレビが一台置いてあつた。そのテレビでは、殺人事件のニュースをやつっていた。ふうん、と、素つ^{タメ}氣無い^{タメ}気持ちで見る。

「嘘！ マジでかよ！」前の学生軍団が大声を出す。クリスマスの記念に来ているのだろう。男が三人、女が三人だ。「あれ、うちの近所だつたんだけど」「ポニー^{ポニーテール}の髪の子が言つた。早くしてくれ、と思う。風香が怒り出す前に、早く買つてくれ。

「いらっしゃいませ」三分後、やつと俺らの番が来た。正確には、一分五十秒だつた。ヤンキーのような風貌の男が、レジに立つてゐる。この遊園地の、可愛らしいキャラクターの描かれたエプロンが、面白いほどに不釣合^{アシメ}いだつた。

「アメリカンドックとホットティーを、二つずつ」笑いをこらえながら言つ。

「レモンとミルクはどうしますか？」

「ミルクを二つ」確かに、風香はミルク派だつたはずだ。

「では、関係者用出入り口の近くのお席が空いておりますので、そちらでお待ちください」ヤンキーが敬語を使つてゐる、と思うと、笑いがこみ上げてくる。まるで、ピエロが喋るような、矛盾感があつた。

案内された席に着き、上着を脱ぐ。店内は、そこまで混んでいなかつた。改めて、早く来てよかつたと思う。

「おい！ どこに行つたつて聞いたんだよー！」 関係者用出入り口のほうから、大声が聞こえる。喫茶店の中が、静まり返る。そして、ひそひそ声が喫茶店内にあふれる。

「つるさいね、なんか」 チョー迷惑なんだけど、と彼女は言つ。さつきの学生軍団が、外に出て行つたのが見える。

「なんか、事件でもあつたんじゃないの？ クリスマス・イブだし」 記念日には、何かしらの事件は起きただろ？ セッキだつて、絡まれたし。

「静かにしてください。そんなに怒鳴らなくてもいいじゃないですか。まず落ち着きましょ？」 子供のような声が関係者用出入り口から聞こえた。

「この園内にはまだいるんです。それだけでも、大収穫です。あとは、園内全域封鎖、犯人を、閉じ込めます。ランがさらわれているんです。何としても、捕まえなければいけません」 たまたま、ドアの近くにいた俺しか聞こえていないと思うが、何を話しているのだろうか。

「ハジメくん。ヒロシくんとかは、どうするんだ？」 セッキの、大聲の男が『ハジメ』という、子供に話しかけている。

「来てもらいましょう、三人全員に。何せ、トキオくんがリーダーですから。それに、捜査計画のプロのアサミさんにも来てもらわないと。ヒロシくんの情報力も必要ですし」

「ススムに連絡を取つて、みんなを呼んでもらえばいいんだね？」 「はい。よろしくお願ひします。あと、チョウスケくんも呼んでください」

「わかりました。規則は……」

「破るものですよ。常識です」 どこかで聞いたような台詞だと思ったら、有名な刑事ドラマで主人公が言つていた台詞だった。

とりあえず、『スプラッシュ・コースター』にでもこきましちゃうか、と声が聞こえる。

「どうしたの？」風香が、ミルクティーを飲みながら聞いてくる。

「いや、なんでもない」と答える。

「あのせ、このあと、どこ行く？」風香がガイドマップを広げる。スプラッシュ・コースターは、やめておいてくれ、と先に断つておく。

高田

「なあ。後ろにいた人、あのもめてた人たちっぽくね？」國分が後ろを指差す。

「そうか？」服の色とかは、確かに似ている気がするが、運命的にそう出会うわけもないだろう。

「早く！アトラクション混んじゃうよー」藤野フジノが俺ら一人を呼ぶ。

その声についていくように、みんなが座っている席へと急ぐ。

「あの方、さつき並んでたときに後ろにいた人ってさ、あのもめてた人たちっぽくね？」

「またその話かよ」俺らは、その話題のしつこさに呆れてしまう。

「だつて、マジで似てるもん。視力1・5の俺をなめるなよー」

「だからといって、同一人物とは限らない。仮にも、今日はイブだよ、イブ。少しくらい似ている人が来ていたって、不自然じゃない」齊京が言う。

「そうかもしれないけどよ……」國分は、少しうな垂れる。

「おい！どこに行つたって聞いたんだよー」関係者用のドアから、あまりにも場違いな太い声が飛び込んでくる。いきなりの大声に驚き、喫茶店内は静まり返る。

「何？今」向野ヒロノが小さい声で俺らに聞いてくる。

そして、それに吊られるように、小声で話すものが増えてくる。小声が、喫茶店の中で集まり、ざわざわという音になる。

「早く出ない？」と、前田が不安げに言つ。

「そ、そうだな。早く出よう」俺はそう言つて、席を立つ。

「そのほうが、確かに無難だな」俺の一聲で、みんなが飲み物を持つて出口へと、小走りで向かう。

「おい、臨時ニュースだつてよ」國分が近くのスピーカーに指を刺しながら言つ。確かに、周りのスピーカーから何かが聞こえるとは思つていたが、臨時ニュースだとは思わなかつた。耳を澄ます。

「臨時ニュースです。昨日、月夜市で起きた殺人事件の有力な情報が、入つてきました。犯人の名前は、香田 実^{ミノル}。性別は男。黒いコートを着ていて、身長は約180cm。サングラスをかけています。被害者は、恋人の風野 恭子さんです。十五歳の女の子が、犯人によつて誘拐されています。恋人が、犯人から逃げている最中に拳銃で打たれています。恋人が、犯人から逃げている最中に拳銃で打たれている模様から、拳銃を所持しています。十分に気をつけしてください」

「ふ〜ん。帰るときは気をつけろってことか」

「さつきのもあるし、なんか怖いね……」藤野が國分の顔をふと見る。

「ま、こんな大勢の人人がいるんだし、会う確率も少ないでしょ」

「お、ついたんじゃね？」観覧車」齊京が観覧車を指差す。観覧車の大きさとしては、日本の中でも結構大きいほうらしい。下から見ても、大きいとわかる。周りのレトロな雰囲気の街の中に、観覧車があるのは、ここが異世界のように感じられた。

観覧車を見て、「でけー」と、思わず声が出る。

「でも、すごい人が並んでるよ」前田が、苦笑まじりに言つ。行列を見て、「なげー」と、思わず声が出る。

「どうしようか……」向野が、ココアを飲みながら言つ。

「並ぶぞ」國分が、列の後ろとは逆方向のアトラクションの方に歩き出した。

「おい、そつち逆だぞ」齊京が呼び止める。

「ショートカットするんだよ」國分が、微笑みながら言つ。

「まさか、クーポンか？」

彼はにこりと笑つて、「そう、優先クーポンだ」と、國分は六枚

分のチケットを頭の上に、大きく掲げる。

早く来いよ、と國分が俺らのことを急かす。わかつてるよ、と言い俺らはまた、走り出す。

明村

「深雪！」

「いいよ、早く逃げて！ 水がこっちに来るから！」

「大丈夫だよ、しつかり僕の手を握つててね」後ろのほうで、コンクリートが壊れたような音がした。水の流れの勢いが増してくる。ゴウゴウと、音を立てながらこっちに向かってきている。深雪に大量の水がぶつかっている。衝撃がこっちにも伝わる。

水が、川岸にいる俺にもぶつかつた。眼をつぶり、体を川のほうから背ける。

眼を開けて、感覚を手のほうに集中させる。手のぬくもりが全くなことに気づいた。

深雪のことを呼ぶが、何も反応がない。手を、川の中から出してみると、そこに深雪はいなかつた。

意識を戻す。なぜ昔のことを思い出したのかはわからないが、今はそれどころじゃない状況だった。彼女のことを追わなければ。立ち上がり、彼女たちが行つた方向へと、足を踏み出す。すると、前から赤色のロングスカートをはいた女の子がやってくる。それは、よく見ると小百合と呼ばれていた女だった。

「さ、さつきの……」彼女に話しかける。

「ああ、さつきはアリガトね。小百合つて、呼ばれていたけど、本当の名前は、藍田 （アイダ） 蘭 （ラン） よろしく」深雪とは、全く違うボーカル

ユな性格だな、と思つ。

「僕は、明村 源。（アケムラ ゲン）と言います。よろしくお願ひします。」あの男が、隣にいないこと気に気がつく。まさか、逃げてきたのか？ と疑問に思い、聞いてみる。

「いや、トイレに行つたから。その隙に逃げてきたんだよ」なんだ。この女は。

「それで、これからどうするんですか？」

「いや、みんなないなし……」すると、向こうからさつきの男がやつてきた。すごいスピードでこっちへ向かってくる。

逃げよう、と僕は彼女に言い、手を引っ張る。近くに薄暗い路地があつたので、そこへ身を隠す。何度も来たことがあるので、園内の道はほぼすべて把握できていた。

「ここに隠れていれば、一時間は大丈夫です。今は使われていない、関係者用の通路ですから」

「そうなの？」

「はい。それより、なぜ彼氏のところから逃げてきたなんですか？」

「彼氏なんかじゃないよ。あんなの」即答される。じゃ、あれは誰なんだよ。

十分は経つた、気がした。「そろそろ出ましょうか？」と蘭さんに聞いてみる。

「うん。もう、行つたんじゃないかな？」と答える。彼女の手を再び握り、立ち上がる。外に出て、左右を見渡す。近くには、黒いコートを着た男はいなかつた。

「行きましょうか」

「あのや、せつきから思つてたんだけど、何であたし達、手をつないでるの？」恋人じゃあるまいし、と言われる。確かにそうだつた。初対面の人と、手をつないでることに、今はつきりと気がついた。「い、いや。あの人に気づかれないようにするには、これが一番見つかりにくいくんじやないかな、と思いまして」僕は、思つてゐる以

上へ、嘘をつくのが下手らしく。愛想笑いを浮かべる。

「なるほど。会つたばかりにしては、いい判断じゃない」

「や、そうですかね」下手な嘘が通つてしまつたので、驚きを隠せない。

「うふ。なかなかいい案。出合つてすぐ、そんな案は浮かばないよ。ターニミヤ君に似ているよ。そんなとこ」彼女は、僕に微笑む。心臓が、バクバクと音を鳴らし、顔が火照る。

「早く行きましょう」と言い彼女の手を、強く握る。

中谷

ジョット・コースターは無しになつたが、ヒドイ事にその次に行きたくなかった所に行くことになつてしまつた。『お化け屋敷』だ。実は、俺は靈やお化けが苦手だった。と、いうより、暗いのが苦手なのだ。俺の三つのコンプレックスの中の一つがこれだ。だが、彼女の前でそんな弱音を吐いていられない。クリスマスイブにフ卜れるなんて、ダサすぎる。

「早く乗ろうよ、爽」彼女が急かしてくる。ああ。と、答える。語尾が震えていいなか、少し不安になる。

お昼前なのか、アトラクションにはすぐに乗れそうだつた。何か事件よ、起きてくれ。と、叶はずもないのに、天に願つてみる。人工物の林の道を通り、アトラクションの乗り場へ行く。ビッグやら、『乗り物』らしい。少し、ホッとする。

「行こつか」声が裏返つてしまつ。まだ、怯えているのか？ 俺。

アトラクションに乗り込む。目の前には、イスが一つあつた。これに乗るのだろうか。左隣の説明員が前のイスに乗るよう指示した。

説明の通りに、イスに座る。背もたれに寄りかかると、耳のそばのスピーカーから、不気味な音楽とともに声が聞こえる。「よつこそ！ 『ホラーマンション』へ。ここでは、靈にとりつかれたマンションを救うために、靈を退治してもらいます」

どんな物語だよ、と心の中で突つ込む。ゆつくつと、アトラクションが動き出す。

「では、出発！」係員が、アトラクションの雰囲気とは不釣合いな声で言つ。

「風香って、こういうのに強いの？」恐る恐る、聞いてみる。

「うん、大好きだよ。お化け」爽は、どうなの？と、彼女は髪をかきあげながら、聞いてくる。

「あ、いや……。俺も、だよ」声が裏返った気がした。無理矢理、笑顔を作る。

いきなり、進んでいたアトラクションが止まる。まだ始まつたばかりじゃないか、と思う。

ふと気がつけば、周囲には俺らしかいなかつた。ギシギシと、木箱がきしむ音が聞こえる。

「ねえ、何？」この音」風香が、俺の右手を握る。心臓の鼓動が速くなる。

いきなり、ドン。と衝撃音が鳴り響く。何が起きたか、わからなくなる。

「え？ ミイラ男？」結局、俺は最初の三十秒で、失神してしまつた。起きたときは、ちょうどアトラクションが終わっていたので、風香に、最初に出てきた人は何だったのか、と聞いてみると、「ミイラ男」と彼女は答えた。

「マジで？」あの包帯野郎に氣絶させられたのは、いささか不愉快だった。

「でもさ、結構怖かつたよね。意外と」

「あ、ああ」

「じゃ、次どこ行く？」風香は、かばんからガイドマップを取り出した。「次こそ、ジェットスターに行こうよ」え、と思わず声を上げてしまつ。まだ、あの刑事達がいるんじやないか？

「どうしたの？」爽

「いや、なんでもないよ。風香が行きたいんだつたら、そこでもいいよ」

「じゃ、ここで決まりね」じゃ、早く行こうよ、と彼女は言い、走

り出す。

高田

「まさか、國分があんなものを持つてるとは思わなかつたよ」俺は、思つたことを素直に言つた。

「それも、優先乗車券だとは思わなかつた」

「ま、他にも何枚があるけどね」國分は、皿邊づに言つた。
「で、どうする?」齊京が、声のトーンを低くして聞いてくる。

「どうしたんだよ。齊京」

「いや、この観覧車、一人乗りなんだよ」思わず、え、と声が出る。
「何で先にそういうことを言わないんだよ!」この中の、誰か一人
が女子と一緒に乗らなきやいけないんだぞ!」そんなの嫌だね、と
俺は言つ。正確に言えれば、彼女以外は、だ。

「じゃあ、こんなのはどうだ?」國分は、あるルールを持ち出して
きた。

「まず、俺らでじゃんけんをする。それで、負けたやつが女子と一緒に
乗るんだ。で、それじゃあその負けたやつがかわいそうだ。だから、他のアトラクションでも、それを行う。ってのはどうだ?」「
おお、と思わず言つてしまつ。國分にしては、まともなルールだつ
たからだ。

「いいね。俺、賛成」齊京が、賛成した。お前はどうするんだ?
という眼で、二人が俺を見る。

「お、俺も賛成」

「よし、これで決定だな。あとは、女子にこのルールが通るかどうか
かだ」さあ、ここからが勝負だ、と國分が小声で言つ。

「あの、女子の皆さん。重大な事実が発覚しました」

「國分君が、クーポンを持つてることなら知ってるよ」向野が、自信満々に言つが的外れである。

「実は、観覧車の一つに乗れる乗車人数が……一人なんですよ」

「それで？」と前田が聞いてくる。

「つ、つまり。俺ら一人、前田たちも一人。一人ずつ男と女が余つて……」

「あ！ つてことは、誰かが、男女一組で乗らないといけないんだ！ つて、え？」

「ウソ！ マジで？」女子たちが驚いている。『歡喜』より『拒否』の気持ちのほうが勝つているように、聞こえた。

「ああ。本当じゃなかつたら、こんな話する必要ないじゃないか」もつともだよ、國分。

結局、國分の『ジャンケンルール』を採用した。それが一番合理的にも思えたし、俺にとつても、一番都合のいいルールだと思えたからだ。

「まさか、言いだしつべの國分が女子と乗るとは思わなかつたよな」齊京が笑いながら言つ。

「確かに。あれは、想定外だつたな」國分自身も、予測していなかつただろう。

この観覧車には、『俺・齊京』『前田・藤野』『國分・向野』のペアで乗つている。きっと、國分も頑張つてゐるのだろう。

「で、どうするの？ 前田とは」

「ああ。帰りにでも、とは思つてゐけど……」

「なにか作戦とか、無いの？」

「いや、特に……」

「おい、マジでかよ。それはきついぜ、結構」

「じゃ、どうすればいいんだ？」齊京

「その前に、俺と國分が協力するから、こっちの事情も聞いてくれない？」頼む、と齊京が言つた。

観覧車は、まだ四分の一しか進んでいない。

「ホントに乗るの?」藍田さんは、大きな目で俺のことを覗き込んでくる。

「は、ハイ、大丈夫ですよ。僕も苦手ですから。絶叫系は」
俺らは、怪しい男から逃げてジェットコースター乗り場へときた。あいつから逃げるには、アトラクションに乗るべきだ、という藍田さんの意見を取り入れて、一番近いこの『ダイビングコースター』に来ているのだが、俺らは、絶叫系アトラクションが苦手だということを忘れていた。第三者から見たら、焦りすぎだ、と言わてもしょうがない状況だ。

「まあ、園内にあるジェットコースターの中でもゆっくりなスピードですから。大丈夫ですよ」

「あのさ、やつから思つてたんだけど、あたしがタメ語なのに、あんたが敬語つておかしくない?」人前では、敬語をなるべく使うようにしている俺にとつては、考えられないこと一言だった。

「そうですかね」あえて、敬語で返す。

「そうだよ。絶対おかしい。だからさ、ここで一回決めちゃおうよ。ルール」彼女が人差し指を立てて、言つ。

「まず、タメ語に直して。カップルっぽくしてんのに、あんたが敬語だったらおかしいでしょ? 他にも、『藍田さん』じゃなくて、蘭でいいから。あたしも、明村君か、源つて呼ぶから。あと、あいつが来たら、私にすぐ知らせること。わかった?」

「あ、ああ」タメ語に直す。

「じゃ、行こうよ。今、ぜんぜん並んでないし」彼女は、俺の手を握つてジェットコースター乗り場へと小走りで行く。

こんな時間が、長く続けばいいな、なんて思つたりする。

時計を見る。今、十一時三十分だ。「飯はどうすの?」と彼女に、聞く。

「あたしは、どっちでもいいよ。明村君は？」

「俺は、まだいいかな」ココアも結構飲んだし。

「じゃ、お昼はもうちょっとあとでいいね」彼女は、俺の顔を覗き込んでくる。少し、心臓が跳ねる。

「早く乗ろうぜ。蘭」彼女の手を握って、小走りにアトラクション乗り場へと進む。

「あとで、乗り終わった後にあそこに行つて、お土産買おうよー。」
彼女は、ここから百メートルほど離れた洋風の建物を指差した。きっとあそこが、お土産屋なのだろう。近くに、ジェットコースター乗り場も見える。「いいよ、俺も買いたい物あるし」特になかったが、一応同意しておく。

数分ほど歩いた場所に、乗り場があった。そこから、地下へと階段で下つていき、係員にチケットを渡し、円形の乗り物に乗り込んだ。

今、俺は一連のことを思い出していた。大丈夫、大丈夫。心の中で、呪文のように唱えた。

「ダイビングコースター、発車いたします！」係員の一言で、ジェットコースターが動き出す。

体が、風の勢いでコースターに押し付けられる。

コースターは、決められた線路を走っている。

右へと大きく曲がり、俺らの体も、つられて右へと体が傾く。緩やかな坂を、一気に下つていき、目の前の坂を上つていく。

コースターは一気に昇る。と、思いきや、頂点のところでいったん止まつた。

故障か？ と思うが、いきなりコースターは動きだした。コースターは、ゆっくりと、ゆっくりと、下へ行こうとする。

俺は、しまつた！ と思った。下が見えてしまつたのだ。思わず、目をつぶる。その時だった。

コースターは、フルパワーで、その坂を下つしていく。悲鳴のよう

な音が口を出る。

「コースターは、徐々に減速していく、最初のスタート地点へと戻つて行つた。

「結構、怖かつたね」彼女は、コースターを降りながら言つた。

「ああ。特に最後が」思い出しただけで、身震いしてしまひ。

あ！ と彼女は、いきなり大声を出し、ポケットの中を探り始めた。

「どうしたんだよ、いきなり」と俺が言つと、彼女は「良かった」と言つてポケットの中から、ハンカチを取り出した。

「いや、ハンカチが無くなつたのかと思つて」

「そんなに大事なものなのか？」と聞くと、「そりやあ、大事なものなのよ。私にとつて」と言つた。

そして、彼女は「トイレに行つてくるね」と言つて、ハンカチを大事そうにポケットに入れて、走つていつた。

「待たせちゃつて」「メンね」彼女は、手を振りながら戻つてきた。

「いや、そこまで待つてなかつたよ」

「じゃ、お土産屋さんに行こうか」

「そうだね、そろそろ混み始めると思つし」

「小百合見つけ」背中に寒気が走つた。逃げなきや。悪魔から、逃げなきや。

「逃げるぞ」彼女の手を強く握る。足を一步前に踏み出した、その時だつた。

俺の頭の後ろに、何か感覚があつた。冷たい、ひんやりとした物が頭に押し付けられている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7969e/>

ナットクラッカー

2011年1月9日14時08分発行